

金澤教報

御正忌報恩講「団体参拝」に参加して

去る11月27日から28日にかけて、金沢教区門徒研修小委員会主催の団体参拝に37名の方々とともに参加しました。

27日は大阪の「津村別院(北御堂)」と「難波別院(南御堂)」に参拝しました。

北御堂では、ミュージアムの展示や映像を通して、大坂本願寺の歩みと門徒の営み、そして、南御



真宗本廟（御影堂の前で）

堂では、教如上人と御堂の歴史、そして戦災からの復興と現代の再整備に至るまでの移り変わりをうかがい、御堂筋にある両堂の大きな役割を学びました。

宿泊は西本願寺の「聞

法会館」。翌朝は西本願寺晨朝に参拝しました。高らかに繰り返される念仏や、お東とは違った節回しの声明が堂内に響き渡ると、想像ですがまるで親鸞聖人が法然上人のもとに座していた頃のような感覚になりました。また、東本願寺でも同じ晨朝の時間だと思いつながら読経の声に身を委ねていると、あらゆる場所で脈々と受け継がれている教えの重みを感じました。

続いて真宗本廟へ向かい、結願日中(ご満座)に参拝しました。「坂東曲」の響きは力強く、初めて参加した方からは、「胸がいつぱいになりました。また誰かを誘いたい」との声が聞かれました。

午後はまた西本願寺に戻り、数々の国宝を含む諸殿を拝観し歴史の壮大さを感じました。

今回の大阪・京都の東西本願寺と別院を参拝して、ともに念仏を聞き、教えを受け継いできた数多の先達を深く思う感謝の2日間でした。

本田寛美(第十組 明圓寺)

金沢別院報恩講お待ち受け 若手僧侶による「法話会」開催

今年で3回目となる「金沢別院報恩講 お待ち受け若手法話会」が11月6日から14日まで全5回開催されました。講師は白藤真昭氏・石山可惟氏・中村岳氏・富皓世氏・藤場有希氏の5人で金沢教区4名と能登教区1名でした。毎回10名から30名ほどの参加者があり、法話後は「茶話会」を行い、お茶やお菓子を食べながら法話を聞いて感じたことや、日々の生活で悩んでいること、或いは法話を聞くご縁になったこと等、様々な内容で語り合いました。法話後に「茶話会」を行ったことにより、講師と聴聞者がお互いに関係やそれぞれの考えを深め合う時間と



本堂1階の講堂

なったのではないかと感じます。

この法話会は、「若手の研鑽の場」ですが、参加者から「聴聞できる場が少なくなっている今、この法話会をととても楽しみにしている。若手僧侶が一生懸命話す場は必要だと思う。これからのために今後も続けていって欲しい」というお声をいただきました。聴聞の「場」を大切にしておられる方々の生の声を聞くことは、私にとっても大切な時間となり、改めて「場」が開かれることの意義が問われる法話会となりました。

井上朋裕(第七組 光徳寺)

真宗学院特別講義 開催

『教行信証』の講義といえはその内容についてのお話を聞くことが多いが、今回は「坂東本」教行信証のかたちから見えてくるもの」というテーマで、親鸞聖人の直筆本を実際に手に取って研究された赤尾栄慶氏(京都国立博物館名誉館員・富山教区第八組 慶楽寺住職)の講義から、ほんものの「かたち」に触れてはじめてわかることを教えていただいた。

例えば使われている料紙は基本的に楮紙だが、しばしば漉き返し紙が使われている。『教行信証』の執筆動機の一つは法然の『選択集』に対する明恵の批判を承けての撰述なのだが、明恵の死

後も法然を批判する人々の目を避けて活動・執筆していたので、紙の入手が困難な状況であったと伺える。目立たないように、いろいろな工夫をして紙を用意して執筆を続けられたことがわかる。紙面につけられた「刀子」の当たり、天地に籠状の物で引かれた空間からは丁寧な机に向かつておられる聖人の様子が浮かび上がってくる。

今回、直筆本のスライドを見せていただきながら講義を聞くことが確かにこの『教行信証』を書いたこと、師(法然)の教えの正しさを証明しなければならぬと大変苦労したこと、正しい教えを何としても後世に伝えねばならないと生涯にわたって手を入れ続けられたこと、その思いの深さをいただくことができた。『教行信証』への向き合い方をあらたにさせられるお話だった。

宮地朋子(真宗学院3年生)



講師の赤尾栄慶氏 (10月21日)